

おわりに

- ◆ 昨年五月の「春の会」で、吉元昭治君が最初の文集作成提案をしたが、実現せず、十一月、「秋の会」で再び吉元君が提案して皆の賛同を得て、彼を中心とし、原稿募集も開始した。その後不運にも、彼は体調を崩し、今年二月の新春懇親会で、急遽「城北一期有志の会」が引き継いだ。この時既に十篇以上の寄稿があったのは、有難かった。
- ◆ 文集作成経験者の近藤君を、顧問・世話人会の助っ人に頼み、自称編集委員会を急造し、今日まで、六回に亘る会合を開き、時には激論を交し、枯渇しつつある知恵を絞って来た。
- ◆ 問題の多くは、叙述や文字の正誤やパソコン入力ミスの問題であった。叙述や文字は執筆者との協議により、入力ミスは入念な校正により、適正化を図ったが、頭も目も衰えた吾々のこと、取りこぼしは免れ得ず、悪しからず予めお許しを乞う次第。
- ◆ 作成コストダウンには老人力を注いで相当の成果を挙げたが、各ページ総てを、完成像と同一にパソコンで仕上げる技術の自信はなく、その一手手前で手を上げた。有難いことに、会員皆さんの募金協力で赤字から免れることが出来、心から感謝している。
- ◆ 文集を読むと、同一経験をしていながら、夫々異なる記憶をしている例に遭遇することがあり、面白い。卒業以来七十年のなせる業か。
- ◆ 吾々の中学時代は、大変暗い時期と言われているが、この文集では、想像よりも明るく生きていたように読める。一方では、瑞々しく成長している若さの力のためかと思ひ、他方では、七十年経っても書く気になれずに留まっていた記憶が多くあるのかとも思ふ。

編集委員会

近藤 素夫
重松開三郎
八田 耕作
水野 篤行
山本 康